

もくじ
新古の武具 畳胴具足と星兜鉢 … P1
足立区で発掘された噴砂「砂脈」 … P3

足立史談

第 636 号

2021 年 2 月 15 日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田 5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



最近相次いで足立の武家社会を象徴する甲冑の研究成果が公表されました。
一つは現在、郷土博物館「名家のかがやき」展（二月三日まで）で公開中の畳胴具足（たたみどぶくろ）、いま一つは東京国立博物館所蔵の星兜鉢です。
畳胴具足は幕末動乱期を象徴し、星兜鉢は中世武家社会を物語る貴重資料です。今号では、この二つの研究成果を紹介いたします。

1 畳胴具足 日比谷家伝来

具足の資料名は「鉄黒漆塗亀甲鉄繫畳胴具足」（てつくろうるうしぬりきつこうがねつなぎたたみどぶくろ）です。黒漆を施した黒い具足で、亀甲型の鉄を繫いでおり、コンパクトにたたむこともできる胴になっていきます。

評価をいただいた西岡文夫氏（甲冑師・日本甲冑協会）によると江戸時代中後期の上級武士（大名もしくは上級旗本）が用いた「工芸品的評価も高い」仕様で、作者

の明珍宗近は、今治藩主の具足の作例でも知られている甲冑師でした。漆の黒の輝き、技巧を尽くした亀甲型の鉄のつなぎ、具足をつなぐ様々な部品一つに至るまで高度な技術に支えられています。実用品ながら氣品を備えた具足として見ることも出来ます。

【資料紹介】

新古の武具 — 畳胴具足と星兜鉢 — 多田 文夫

幕末期に武装した小右衛門新田の郷士、日比谷家の伝来品で、治安を担った地域武装の代表的資料として、同展の図録でも一号資料として紹介されています。

当時、瀏江領（江戸時代の足立区の大部分）で武術の拠点の日比谷家でした（「武術英名録」）。北辰一刀流の剣術道場を開いて

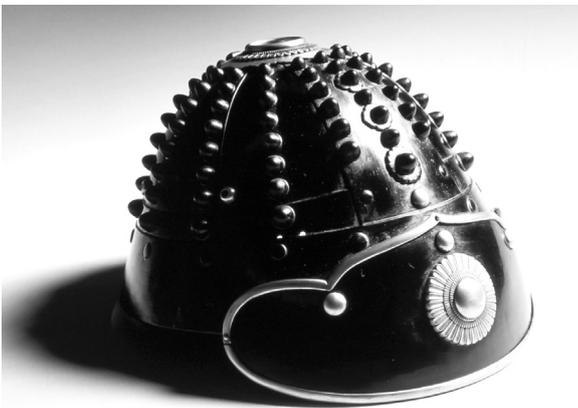
おり、家伝で多くの武具を備えていたといえます。実際に伊興の実相院に存在する「浪人征伐の碑」や古文書が語るように、幕末期の足立は騒乱状態にありました。展覧会で公開している他の二領の具

足は実用品で、とくに栗色の二枚胴具足は、胴の部分に傷が確認できません。実戦なのか訓練なのか判りませんが、剣術が実用の技術であった時代を物語ります。

2 足立氏ゆかりの星兜鉢 東京国立博物館蔵

伊興の経塚で明治十二（一八七九）年に出土し、かつての郷土博物館常設展示でも復原レプリカを展示していたのが「星兜鉢」です（写真は郷土博物館蔵の復原レプリカ）。

これまで、その歴史的背景は未詳でしたが、この度、東京国立博物館の研究員、佐藤寛介氏によって、鎌倉武士の系譜を引く足立氏の遺品で



星兜鉢 復原レプリカ 中世武士足立氏の遺品である可能性を指摘する見解が出された。



小普請組支配の落合新三郎が日比谷健次郎に出した身元保証書です(上掲写真)。落合が世話をしていた齊藤龍太郎という人物とその妻のたみが健次郎方に住むことになったことに際し、安政三(一八五六)年に出しています。

3 在地武家の最後と始まり

(1) 幕末の身分関係を表す古文書

江戸時代の末、武家社会の掉尾を飾ったのが畳胴具足でした。上級武士が用いる具足が、日比谷家に伝来したのは江戸末期の社会変動が背景にありました。

日比谷家文書のなかには、幕府機構、武家との関係を示す希少な資料が含まれています。代表的な古文書の一つが、講武所世話心得であった

あろうと想定する論文が発表されました。

注目すべきは、差出人の落合と健次郎の書き位置で、落合は健次郎の名の位置を自分より上に書いています。身元保証という内容であっても、書式は同身分もしくは格上としていていることは明らかです。落合自身は小普請組に属していますので一般的には旗本と想定できます。こうしたことから、すでに日比谷健次郎は小右衛門新田の百姓という位置ではなく別身分(武士)になっていると考えられます。他の古文書などからも在村の武士と捉えるのが妥当で、今回の展覧会ではそれを「郷士」と表現しています。

もともと一七世紀末ごろ(元禄期)まで足立の新田開発人の多くは「土豪」とよばれ新田村の中心であるとともに関東郡代伊奈氏の家臣であるという二重性をもっていました。そして文政期以降の社会動乱を経て、最後の武士的存在として日比谷健次郎があり、それを象徴するのが畳胴具足をはじめとする武具類でした。

平安時代後期は武士が登場した時代として知られています。検証を進められた佐藤研究員により伊興経塚から出土した兜は、十一世紀前半の希少品と位置付けられ、さらに所持者として鎌倉武士の足立氏の可能性を指摘されました。研究成果は東京国立博物館の研究誌『MUSEUM No.六八九(同館発行、令和二年十二月)』に掲載されました。このたび佐藤研究員のご厚意で論文の要旨をいただきますのでご紹介します。

(2) 平安時代後期の兜

本稿は、東京国立博物館が所蔵する東京都足立区伊興経塚出土品について、調査内容を報告するとともにその歴史的意義を論じたものである。出土品の内容は、甲冑の兜1点・小札4点、経典を納める鉄製経筒5点、密教法具の五鈷鈴1点・鉢6点・台皿3点、太刀金具1点、銭貨18点、木製漆塗瓶子2点である。この中でもっとも注目されるのが兜で、経塚からの出土例としては国内唯一である。さらに、全体の形状及び細部の特徴から、製作時期は平安時代後期(11世紀前半)で、現存する兜とし

佐藤寛介

「東京国立博物館所蔵十二間星兜鉢の歴史的意義―東京都足立区伊興経塚出土品の再評価―」

ては国内最古級のものと考えられる。そして、鎌倉時代中〜後期(13世紀後半)に改修されていることから、所持していた武家に代々受け継がれたと想定される。日本の武士にとつて、甲冑は単なる武具ではなく、武家を象徴する存在であり、とくに兜はもっとも重視された部位であった。伊興経塚では、武家を象徴する兜が埋納されていることから、造営主は武家であり、その重要人物を供養する意味があったと想定される。伊興経塚の造営年代は、各出土品の製作年代から、鎌倉時代末期(13世紀末〜14世紀初頭)の可能性が高い。平安時代末期〜鎌倉時代(12〜13世紀)にかけて、伊興経塚の所在地一帯を支配していた武家が足立氏である。足立氏は霜月騒動(1285年)で当主を失っており、筆者は伊興経塚の造営主及び兜鉢の所持者として足立氏を想定している。

* * *

西岡文夫氏と佐藤寛介氏のご協力により、足立の武家社会のはじまりとおわりを象徴する武具について深く知ることができました。記して感謝申し上げます。

なお佐藤研究員から伊興経塚のことについての情報があればぜひ指示されたいとのことです。何か情報がありましたら当館までお知らせ下さい。(当館学芸員 文化遺産調査担当係)

足立区で発掘された噴砂 「砂脈」

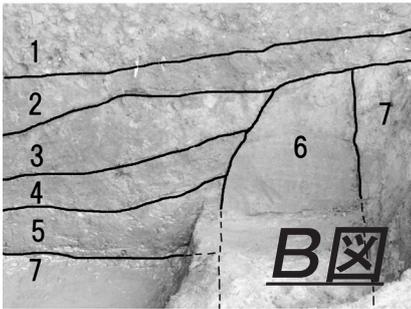
田中千代吉

◆埋蔵文化財からのメッセージ

□伊興遺跡で平成二一年九月に噴砂跡である「砂脈」が発掘調査により発見された。一方、舎人遺跡では平成一六年一〇月に発掘調査において足立区最初の噴砂（ふんさ）が確認されている。この二つの遺跡で見つ



【A図】噴砂跡（砂脈）を壊し（分断）てつくられている第1溝（[No. 2試掘1号溝]*破線の間）砂脈は溝の下に続いている。



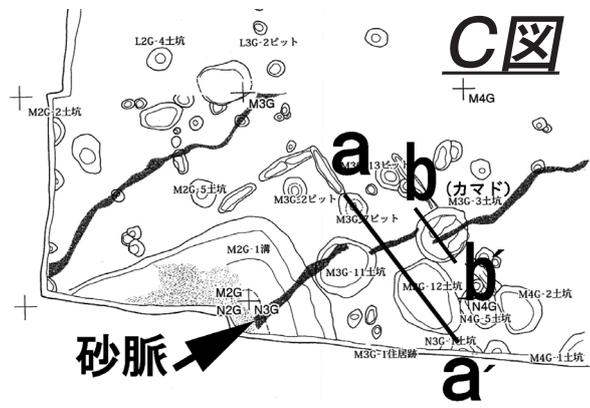
【B図】元来の地層である地山「7」を割ってできた砂脈「6」のわかる場所の断面。「5・4・3・2」は、溝を掘った後に体積した地層。溝を掘ったとき、砂脈層も若干斜めに削られている。

【B図番号】

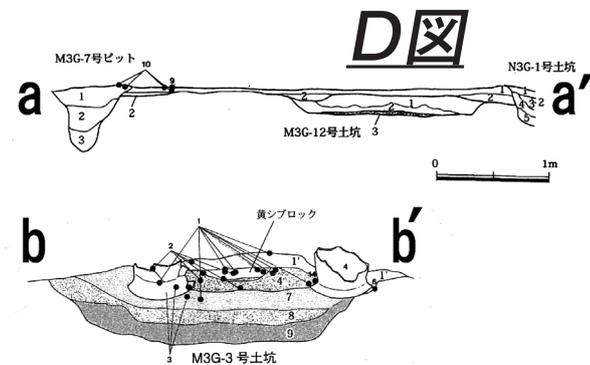
- 1 明褐色土【耕作土】
- 2 黒褐色土・焼土・炭化物
黄褐色シルト含む
- 3 黄褐色シルト・シルトブロック混入黒褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 黄褐色シルトブロック混入・黒褐色土
- 6 灰褐色砂泥【噴砂】
- 7 黄褐色シルト【地山】

◆伊興遺跡で発掘された砂脈

伊興遺跡J地区の【A図】を見ると「No.2試掘1号溝」と噴砂（砂脈）は交差している。



◆舎人遺跡で発掘された砂脈
「舎人遺跡IV」（第5章4節）では噴砂が古代のさまざまな遺構を切り



【C図】 M3G-1住居址と砂脈位置の平面図と断面図制作位置（a-a'、b-b'で示している）
【D図】 M3G-1号住居址の柱穴と床面・土坑、M3G-3土坑（カマド）の断面図。

かった噴砂Ⅱ砂脈（さみやく）の出来た年代とそれを引き起こした地震はいつの時代なのかを考えたい。「砂脈」とは、液状化現象に伴う噴砂の通り道で砂や礫の詰まった細長い割れ目の形を示している。この現象は気象庁の震度階級のVI（烈震）・VII（激震）で発生する。特に液状化しやすい地盤条件ではV（強震）でも発生する。

その断面【B図】から「No.2試掘1号溝」は噴砂（砂脈）を壊して作られている事が分かる。そして砂脈は伊興遺跡の地山（黄褐色シルト層）を引き裂いて噴出している。砂脈は調査区域内で長さ一メートル・最大幅五〇センチメートルの規模であった。

裂いていたとし、地震は古墳時代の末期以降から江戸時代はじめ頃の間起こったとしている。しかし私は以前より、舎人遺跡の噴砂（砂脈）について五世紀前半頃の可能性を指摘し、今回改めて検討してみた。

「No.2試掘1号溝」は、器台・S字甕・複合口縁壺・有段口縁杯などの出土品から、四世紀の溝であることがわかつている。このことから伊興遺跡J地区で砂脈を引き起こした地震は、四世紀後半以前の時代であることがわかる。

また四世紀初頭のJ5G-4号方

形周溝墓も【E図】にあるように前述の砂脈の延長線上で交差しているが、a-a'の断面図【F図】を確認してもJ5G-4号方形周溝墓の堆積物に砂脈の影響を受けた痕跡すらない。以上のことから舍人遺跡の噴砂・砂脈を引き起こした地震は四世紀初頭以前であることがわかった。

伊興遺跡・舍人遺跡のこれらの砂脈を引き起こした地震が同じ地震と考えるならば、現代から一七〇〇年以前の古い時代の地震跡であることが判明する。

◆舍人・伊興の陸地化

噴砂が起こる前提として舍人遺跡・伊興遺跡の場所が陸地化(微高地化)されて以降の大地震であることが考えられる。では陸地化したのはいつ頃なのか。地質学の久保純子氏によれば六〇〇〇年前頃の海面は現在の海面より二〜三メートル高く、

荒川低地では川越付近まで、中川低地では栗橋付近まで河谷に沿って海水が侵入し、奥東京湾は最も拡大した。そして、五三〇〇年前に起きた海面の低下(マイナス一メートル)により三角州の急速な前進がはじまり約三五〇〇年前の海岸線は草加〜三郷付近にあったと言われている。

一九六九年の永峯光一氏による伊興遺跡谷下地区の発掘調査で穴状の遺構の中から土師器と共伴して縄文時代後期の加曾利B式土器が出土している。私もこの地点から北へ十数メートルの畑で縄文後期初頭、約四〇〇〇年前の土器といわれる堀之内II型安行式の縄文土器・石鏃を表面

採集している。この他にも保木間五丁目の花畑遺跡で縄文時代後晩期の分銅型石斧を採集している。一九九一年の下水道関連の発掘調査において伊興聖堂耕地の南東端の低位面で、

やはり堀之内II式の深鉢型土器が出土。谷下地区では安行式土器・三三・耳栓二点・石器二点が出土している。舍人遺跡では黒曜石片が一点出土している。

以上のことから舍人遺跡・伊興遺跡・花畑遺跡がある毛長川右岸の自然堤防上の微高地は、少なくとも四〇〇〇年前には形成されていたことになり、採集などのために縄文人が逗留していたと考えられる痕跡がある。しかしこの時代の遺構はいずれの遺跡でも検出されておらず砂脈との新旧関係は不明である。

◆地震の年代を考える

産業技術総合研究所の穴倉正展グループ長等の地質調査によると千葉県館山市西川名の海岸段丘から見て、一九二三年の関東大震災で二メートルの隆起、記録にある一七〇三年の元禄地震、三〇〇〇年前・五〇〇〇

【参考文献】
『地震考古学―遺跡が語る地震の歴史』一九九二 寒川 旭
『伊興遺跡』一九九七 足立区伊興遺跡調査会
『舍人遺跡・IV』二〇〇九 足立区教育委員会・足立区遺跡調査会、
『東伊興四丁目常福寺境内貯溜槽建設に伴う発掘調査完了報告書』二〇〇九

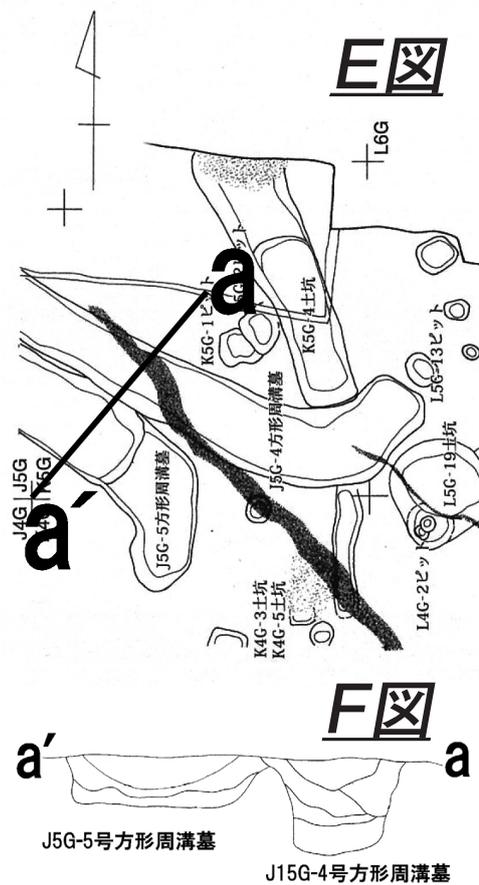
足立区教育委員会、『都内緊急立合調査集録』IV一九九一 東京都教育委員会、
『東京低地の形成を考える』二〇〇二 葛飾区郷土と天文の博物館
『科学の扉・関東で起きる地震』二〇一四年七月二二日版 朝日新聞

【掲載図版】
各調査報告書等の図版を加工加筆して掲載した。
A図 (図3)

『東伊興四丁目常福寺境内貯溜槽建設に伴う発掘調査完了報告書』二〇〇九 足立区教育委員会、
B図

発掘本調査に伴い撮影した写真(伊興遺跡調査会)に加筆
C図 頁46図30・頁121図80
D図 頁121・図80

E図 頁47図31・頁70図40
F図 頁71図41
『舍人遺跡・IV』二〇〇九 伊興遺跡調査会



【E図】 方形周溝墓と砂脈位置の平面図と断面図制作位置

【F図】 J15G-4号方形周溝墓と砂脈位置の断面

年前・七二〇〇年前の四回の地震では、それぞれ六メートルの隆起が確認されている。この大地震の痕跡と、伊興・舍人地域の陸地化の時期とを考えあわせると、伊興遺跡・舍人遺跡の噴砂・砂脈を引き起こした地震は推定ではあるが縄文時代後期の三〇〇〇年前に起きた地震である可能性が高いのではないかと思う。

(澗江の歴史研究会)